

ある満州体験

大 原 信 一

四月二十四日、外国文学会の主催で「退職記念講演会」というまことに名誉ある機会を設けていただき、多数の方々にはむかっしてお話することができたのは身に余る光栄であった。ここに改めて心底からお礼を申し上げるとともに、せっかく機会をつくって下さったにもかかわらず、なんら内容のある話ができなかったことをお詫びしたい。この小文は当日のメモをもとに、これに筆を加え形を整えたものである。

1

同志社に奉職してから、いつのまにか二十八年余りたってしまった。その間、私は主として「中国の文字改革」を中心テーマとしてやってきた。「文字改革」というのは、漢字改革、ローマ表記法の制定のほかに、北京語のうっぴりかわりや共通語の形成などをも含み、また文化の大衆化などとも関連しており、道草を食いながら、ずいぶん回り道をしてしまった。一昨年の末やっと出た『文字のうっぴりかわり』という本に不十分ながら私なりの見解をまとめてみたが、いろいろの都合で割愛したり圧縮した部分がすくなくない。将来もし機会があれば「中国の国語改革」という形で、もうすこし広い視野からこの問題をとらえなおしてみたい。

いま大きな関心をもっているのは、日本語を勉強したうえで、中国語と日本語を突き合わせ、表現のズレを明らかにすることである。先年、在外研究のみぎり、上海外国語学院日本語科の若い先生がたの研修の相手をしたのが、私の日本語との馴れそめであった。その年に、私は還歴を迎えたのだから、私の日本語の勉強は文字どおり「六十の手習い」である。このたび再就職した大東文化大学の中国語学科は北京外国語学院の日本語学科と交流のちぎりを結んでいる。こちらから教員や研究生・学生を研修に派遣するとともに、先方から派遣された研究員を受入れている。私にはからずも北京から笈を負って来日した四名の日本語の専門家の手伝いをしながら、「手習い」を再開することになった。

講演の交渉を受け、どんなテーマを選んだらよいか思案をしているころ、テレビや新聞は連日のように中国残留孤児と呼ばれている人たちの祖国訪問・肉親さがしの模様を伝えていた。同じような運命をたどった人の数は、日本の政府がつかんでいるところでもいまなお数千に達するというが、なかなか正確にはつかめないらしい。なぜ、この人たちだけが、と胸の痛む思いをされた方も多いだろう。この悲しい問題はなぜおこったのか。発生の遠因にさかのぼる意味で、二つの問題、抗日遊撃隊と日本人移民をめぐって、多少とも私の知っていることを申述べたい。と言って、私はそれほど特別な体験をしたわけではない。ごく短い期間、ちょっと満州をのぞいたにすぎない。ただ、そういう体験を語るべき年代の人がだんだん少なくなってきた。惜別の気持をこめて別れの挨拶にかえたい。

実は、昨秋『東北抗日烈士伝』（黒龍江人民出版社）、『偽満州国史』（吉林人民出版社）という二冊の本を読み、強烈な衝撃をうけたのも、こんなテーマをえらんだ動機の一つである。この二冊の本のなかで紹介されている、抗日救国を生涯の事業とした人たちからみれば、私は敵の側にいたことになる。まがうかたなく侵略者のひとりであっ

た。そういう心の重荷をせおった者の回顧談としてお読みいただきたい。

2

昭和四年（一九二九年）に、私は中学校に入学した。いまになって考えると、私が「満州」を多少なりとも意識しだしたのは、どうもその前後のころからのようである。この年の七月に、「満州某重大事件」の責を負って時の田中内閣が総辞職し、浜口内閣がこれにかわった。陸軍大将・男爵である田中義一・前首相は九月の末に病死した。そんなエライ人を窮地に追いこんだ「事件」ってなんだろう。不思議でしかたなかった。

むかし、日本人は中国の東北部を「満州」とよび、いまの瀋陽を「奉天」とよんでいた。北方軍閥の巨頭・張作霖が北京から列車で帰ってきたとき、奉天の近く、その鉄道と満鉄のクロス地点で大爆発がおこり、列車は脱線転覆するという事故が発生した。張作霖は病院へ入ったがすぐ死亡した。日本の新聞ははやばやと「南方の便衣隊 張作霖氏の列車を爆破」と断じてこれを報じた。陸軍省の詳報では、鉄道守備の兵士が現場で「怪しき支那人三名」を発見、二名を刺殺、一名は逃亡したと述べている。実はこのころすでに民間では、あれは日本の工兵隊がやったのだ、と口コミでささやかれていた。この事件と内閣総辞職とどうつながるのか、不可解であった。敗戦後になって、この事件は関東軍の河本参謀が計画を立て、工兵隊が爆薬をしかけ、独立守備階の東宮大尉が爆薬の点火スイッチを押しだことが判明した。最近出版された、岩波新書の『満鉄』という本にこの事件の要をえた解説がある。

中学三年生のとき、二学期に入ってから、授業中にきこえてくる「号外、号外」の呼び声に満州事変がおこったのを知った。いちばん印象に残っているのは「東洋史」の時間に森井という歴史の先生が、毎回のように話してくれた

時事解説である。そのなかで国際連盟における討議のあらましを知った。そして、中国政府が日本の侵略行為を提訴したこと、国連理事会で「日本軍の撤退」が議決されたことなどを新聞で知った。

この問題（満州問題）のためには国を焦土と化しても、一歩も譲らぬ、こういう方針を日本政府はきめていたように、昭和八年（一九三三年）二月、国際連盟総会で「日本軍の満鉄付属地以外からの撤収」が四十二対一で勧告されると、ただちに国際連盟を脱退した。日本の国際的孤立化がはじまったわけで、私はこうした経過を不安なまなざしで眺めていた。

これと裏腹に、「満蒙の建設」、「青年よ満蒙へ行け」という掛け声がつよくなってきた。そういう空気のなかで、私は昭和九年（一九三四年）に大阪外語に入学し中国語を学ぶことになった。この学校で私は二人の恩師にめぐりあえたことを感謝している。一人は井上翠先生、『井上ポケット支那語辞典』（昭和十年）という瀟洒な辞典は画期的なものだったと思う。なくなった竹内好さんなども、この辞典、井上翠の業績を高く評価していた。もう一人は、井上先生が定年でやめられ、後任として来られた金子二郎先生、この先生から中国と中国語への眼をひらいてもらった。「支那事情」という科目があり、その最初の授業でいきなり板書の「孫文遺囑」を訳さされた。この文章を、あえて漢文書き下し風に直訳して提出したが、次の週によくできたとはめてもらったことを覚えている。この授業はついで国民革命、朱毛連合軍の成立へと進んだ。毛沢東と朱徳が井岡山で合流し、ここに革命根拠地を築く話をききながら、私は朱毛という二字から赤い房のついた槍をもつ兵士を連想していた。

昭和十二年（一九三七年）の三月、私は大阪外語を卒業し、満州を内側からみたいと思って、陸軍の通訳という職業についた。「陸軍通訳（判任待遇）」を命ず、月俸七十円 陸軍省」という辞令をもらった。判任官とは高等官の下クラスで、いちばん下っ端の役人だったが、給料は当時の大学・専門学校卒としては平均的なところで、満州勤務だと倍額くれた。

佳木斯^{チヤムス}に駐在する大阪・第四師団の司令部につとめることになり、六月ごろから十一月の末までそこにいた。当時、佳木斯はまだ鉄道が開通せず、陸の孤島といわれて、ハルピンから船で二昼夜ほどかかった。松花江の濁流だけが印象に残っている。船つき場のあたりに古い町があり、ほぼ河と並行して商店街があった。町のはずれに駅ができて、牡丹江との間に鉄道が通じてから、街の建設は急速に進んだようである。フトンを担いだクーリーが各地から、遠くは山東から続々とやってきた。近郊の大きな農家は堅固な土塀をめぐらし、銃眼が設けられているのが珍しかった。

ここでの私の主な仕事は中国語の文書を翻訳することであった。その文書というのは、ガリ版刷りの抗日遊撃隊に関するものがほとんどだった。そういう刷りものを読んでいくうちに、反満抗日の遊撃戦↓日満軍による討伐↓日本人武装移民団の入植↓土地取りあげ↓土地防衛闘争↓現地農民の反満抗日遊撃隊への参加、というふうな事態の脈絡がわかってきた。そして、遊撃隊のたてこもる山寨の映像と、井岡山や梁山泊のそれとがしだいにオーバーラップしてくるよう感じられた。

九・一八以降、日本軍は短時日のうちに広大な土地を手におさめた。しかし、死傷者はすこしも減らない。むしろ年をおって増えていた。昭和七年には三万をこえ、八年には四万二一九四人、九年には三万九八七四人、十年には五万四七六六人に達したという（井上清、『昭和の五十年』）。

これは満州国ができてから、反満抗日をとる能うなる抗日運動が成長し、いろいろな系列の抗日武装勢力が活動していたからである。そのなかで、中国共産党の系列下の抗日組織がしだいに成長し、その数が増えていた。日満側では、反満抗日のために立ちあがった者をもすべて「匪賊」、「共産匪」とよんでいた。

昭和十年（一九三五年）の七月、長征の途にあつた中国共産党は「八・一宣言」を発表し、全中国人にむけて抗日救国統一戦線を呼びかけている。遠くはなれた東北のゲリラ地域でも、この呼びかけにこたえて「東北抗日連合軍」（以下、抗連と略称する）がうまれた。はじめは第一軍から第七軍までであったが、のちには第十一軍までに増えている。

『偽満州国史』によると、ちょうど私のいた昭和十二年（一九三七年）夏の第十一軍までの兵力は三万五〇〇〇人前後で、いちばん多い時には四万五〇〇〇人に達し、これ以外に、抗連の編制に入らないがその指揮下にある兵力が約一万前後ある。

日満軍から奪った武器で武装し、一コ中隊に、小銃のほか軽機関銃三ないし四、他に擲弾筒、重機関銃、歩兵砲、迫撃砲などをもち、各軍の平均三分の一が騎馬隊である。もっぱら遊撃戦術をとり、日満軍の守備地や警察をおそい、経済中心地区、交通の要衝を破壊する。鬪争の必要に応じて地理的条件のよい地帯を占拠し、飛行機・大砲などの威力の及ばないところにひそむ。私がいたころはほぼそのとおりの状況だった。

師団参謀のひとりが転任で内地にかえったみぎり、留守家族にむかって講演したなかで、こう言っている。匪賊といっても、山寨に印刷工場・兵器工場をもち、税金をとって政治をしている。頭目の趙尚志は金持ちで、ゲリラ隊員はサラリーマンだ。民家に宿営すると多額のチップをはずむ（大阪朝日、昭和十二年十一月二十七日）。たぶん民間の口コミでも、この程度のことささやかれていたに違いない。すこし補充訂正を加えておく。

さきに名前の出た趙尚志（一九〇八一—一九四二）という人物は熱河省朝陽県の農家の出身で、村の私塾で三年ほど学んでからハルピンで雑役や小僧をやった。のち中学に学び、一九二五年に入党、五・三〇事件のさいに退学させられ、広州の黄埔軍官学校に学んだ。二六年に東北にかえり各地で地下活動に従事、逮捕・入獄・出獄をくりかえした。澤地久枚さんの『もう一つの満州』（文芸春秋）で詳しく語られている楊靖宇とともに三一年十二月に出獄し、楊とあい前後して反日総会の書記、中国共産党満州委員会の軍事委員を歴任している。楊靖宇が主に南部で活躍したように、彼は主に北部で活動した。一九三五年に抗連の総司令に選ばれている。松花江下流の各地で大規模な抗日武装闘争を展開して勇名をはせた。湯原に堅固な根拠地を建設し、病院・修理工場・政治軍事学校・電気通信学校などを設けている。一九四二年二月、小部隊をひき鶴立県の梧桐河警察分所を襲撃したさい、警察側がもぐりこませていた「特務」に背後から打たれて重傷をおい逮捕されたが、八時間後に死んだ。ときに三十四歳。

以上は『偽満州国史』によったが、この記述は、旧満州国の保存書類にもとづいており、「敵の訊問に屈することなく、苦痛にたえて英雄的気概を示した」と結ばれている。

佳木斯の北岸、やや上流にある「湯原」という地名を、私はよく覚えている。ここに抗連の本拠があるらしいと推測されていたが、情報のルートが全く閉ざされていて、皆目なにもわからないような状態だった。同じ本には、ここ

の情況が次のように述べられている。

抗連の活動する遊撃区内では抗日救国会の組織が発展し、人民代表会議をひらいた所も多い。吉林の東や北滿・南滿の県で人民政府のできたところもあり、ここでは日滿側の政權と対峙していた。とくに松花江の兩岸、牡丹江流域およびその下流地区の「三江省」では、ひろびろとした農村に抗連の鉄騎がみちあふれ、たえず敵軍に進攻・襲撃を続けた。とりわけ依蘭・樺川・勃利一带は抗連三軍・四軍・五軍・六軍・八軍・九軍・十一軍の集結地区となり、各軍は東西南北に疾駆し、大規模な遊撃をくりひろげた。この地区の農村の街や都市は完全に抗連と抗日救国会の手中にはいり、敵が支配できたのは大都市と分散孤立する拠点のみだった。松花江の北岸にある湯原は「三江省」の中心で、抗連第六軍の故郷である。彼らは湯原の人民の「子弟兵」で、ほとんどの家庭から従軍兵士を出している。抗連が日本軍攻撃に出動すると、大衆が自発的に従軍し、遊撃中隊・青年肅清隊・農民自衛隊をつくる。彼らは旧式銃をかつぎ、赤い房の槍をたずさえ、石油カンと爆竹をもつ。戦闘になるとカンのなかに爆竹を入れて鳴らし、重機関銃よりはげしい音をひびかせて、敵のドギモをぬく、婦女会・児童団・救国会も出動して、道ばたで湯茶の接待をしたり、負傷者の担架をかついだり、戦利品をつんだ車をひっぱって帰った。敵は脳みそを絞りつくしたが、この県を「偽滿化で」きなかった。この一帯における党の大衆的基盤がかたく、大いに人民戦争をやり、敵に活潑な闘争をいどんだので、農村はほとんど抗連の支配下にはいり、湯原県域や敵の支配のきびしいいくつかの拠点にも抗連の秘密組織があり、数名の売国的スパイもあえて動き出そうとしなかった。

抗連と大衆の關係がよくわかる。さながらミニ井冈山の感がある。なぜ湯原にそんな堅固な根拠地ができたのか。同じ本によると、九・一八以前に地下党によって農民義勇隊が組織された、とあるから、はやくから根拠地づくりの

条件のあるところとして選ばれていたのであろう。九・一八以後、あらためて抗日遊撃隊の組織に着手したが二度にわたって土匪のため破壊された。七十名のオルグを投入し、三回めに遊撃隊の組織化に成功、三三年から三五年にかけて松花江兩岸にわたって戦果を拡大した。のち湯原県義勇軍の二つの部隊と連合、遊撃区をひろげ、抗連第六軍の母体となった。

4

話はすこしさかのぼる。満州事変がはじまって日満軍による「討伐」がくりかえされるなかで、いわゆる「治安不良地域」に武装移民団を投入することが検討された。

五味川純平原作の映画「人間と戦争」（第一部）で、舞台が昭和三年の東京から満州へ移ると、さきほど触れた鉄道爆破事件の場面が出てくる。ひとりの将校が爆薬につないだコードの点火スイッチを押す。轟音をたてて列車は脱線する——あ、あれが東宮大尉だなと思った。

東宮鉄男、当時は独立守備第二大隊の中隊長であったが、満州国軍の顧問としていくつもの討伐作戦を指導し、関東軍特務部付として武装移民の入植実現につとめた。彼は作戦中に、在郷軍人をもって屯墾軍を編成し永久駐屯せしめるといふ具申書を上官である石原莞爾参謀に提出し、石原の紹介で熱烈な天皇制的農本主義者・加藤完治と会う。東宮・加藤のコンビで満州農業移民の歯車がうごきはじめる。『満蒙開拓青少年義勇軍』（中公新書）という本に、この二人の写真がのっている。

私の上官に後藤大尉という人がいた。兵卒から身をおこして将校になった苦勞人で中国語が堪能だった。この人か

ら、かつて上官であった東宮隊長の名をきくことがしばしばあった。彼はどこか人を信服させるところがある人物のようだった。あの爆破事件の頃から、満州への農業移民を考えていたらしく、隊長室の壁の地図には、予定地に日の丸がかきこまれていたそうだ。いわゆる「北進論」者で、「三江漁夫」と号していた。ごく最近まで佳木斯特務機関長であったときいていたが、ある日（たしか十一月だったと思う）日本の新聞をみて驚いた。「東宮中佐、杭州湾で戦死」とある。東宮中佐をたおしたのは銃弾でも砲弾でもなく、中国人の怨念のかたまりではなかったか、故人にはすまないが、私は一種の不気味さを感じた。

昭和八年（一九三三年）の春、第一次の開拓団が（四九二名）佳木斯の南東九〇キロ余の永豊鎮地区に、続いて同年夏には第二次開拓団（四五五名）がそこからあまり遠くない湖南寧地区に入り、それぞれ弥栄村、千振村と名づけられた。昭和十年代には、この二つの村は理想的な移民村としてジャーナリズムでもてはやされ、満州移民への夢をかきたてていた。だが、この二つの村ははじめの「武装移民団」「屯墾大隊」の名称がものがたるように軍事的性格のつよいものだった。第一次のばあいを例にあげると、屯墾隊長・市川中佐以下、歩兵四〇中隊、機関銃隊・歩兵砲隊から成る軍隊編成であった。

日本は農村対策、治安維持、対ソ国防の必要から開拓団の入植をすすめたが、農地の買収をめぐるいざこざが絶えなかった。「北満では一垧（日本の七段五畝）あたり、既耕地で十円から十七、八円、荒地一円以上という相場であったのを、熟地・荒地平均して一円で買収しようとしたという（『もう一つの満州』）。日本軍の武力を背景に現地農民の抵抗を排除して強制買上げを行った。そこへ、民間で従来から保持してきた武器の一斉回収の実施がかさなる。たまたま日本軍の兵士が土龍山へ掠奪にきたのが直接の導火線となって、昭和九年（一九三四年）三月、依蘭三

区の区長（町村長にあたる）で自衛団長をかねる謝文東がたちあがり七百人の騎馬隊を組織して土龍山警察署を襲い、二十数名の警官を武装解除した。謝文東をかしらに「東北民衆自衛軍」をつくり、これに参加する農民は三千人に達したという。依蘭駐屯の六十三連隊長・飯塚大佐が一コ分隊と少数の満軍・警官を帯同し説得に赴いたが、道路に溝がほられているため下車したところを襲撃され、日本兵二名を除く全員が死んだ。報告をうけた関東軍の西尾参謀長は激怒し、大部隊をくり出して、飛行機と戦車の掩護下に、報復的な大討伐をおこなった。おそらく言語に絶する殺戮がおこなわれたにちがいない。『偽満州国史』には、「土龍山付近の十七の村落が爆撃され、五〇〇〇人余りの農民が爆死した」とだけ記されている。

謝文東ら民衆自衛軍に思想的背景があったとは思えない。第一次、第二次の移民団が入植した直後のことである。日本の計画はこれだけではなさそうだということが農民の間に不安と動揺をあたえたいらしい。二つの移民団の放逐をめざす、この現地農民武装蜂起事件の本質は、農民の土地を守る運動であったとみるべきであろう。それだけに影響が大きく、全満州の抗日武装勢力を鼓舞したものと思われる。

謝文東は抗連第八軍の軍長となり活動を続けたが、のち昭和十四年（一九三九年）三月、ついに日満側に帰順した。『もう一つの満州』によると、帰順後、日本を訪れたさい東宮大佐の墓参をしているし、ソ連参戦後は日本人の避難に援助の手をさしのべる人物に変わった。そして日本の敗戦後、依蘭の山中にたてこもって解放軍に手向かい、一九四六年に捕えられて、佳木斯街頭で梟首の刑に処せられたということである。なかなか正体のつかみにくい人物のように思われる。

私の聞いたところでは、土龍山事件が関東軍の幹部を激怒させた、笑えぬ理由がほかにある。それは、謝文東は飯

塚大佐から奪った軍刀を持ち歩き人々に見せびらかしているという報告である。軍刀は日本軍国主義のシンボルであったといつてよからう。

小説『林海雪原』（一九五七年）は、日本敗退後の東北の解放をめぐる国共が抗争する時期、解放軍の分遣隊が雪の密林地帯を突破して、山中にひそむ敵を撃滅する話だが、この作品のなかに敵役の一人として中央先遣軍浜綏図佳（ハルピン、綏芬河、図們、佳木斯）総司令の肩書をもつ「謝文東」が登場する。

文革のさいちゅうによく上演された「智取威虎山」は、この小説を土台にした現代京劇である。敵の盤踞する威虎山に乗りこみ、智略でこれを奪取する解放軍戦士の英雄的行動を演じたもので、主人公は楊子榮、その設定は小説と同じである。舞台では、最後の場面で匪賊の頭目が日本刀（旧陸軍の軍刀）をふるって、楊子榮と手に汗を握るような大たちまわりを演じる。日本人にとっては、軍刀をふりまわす反動の悪玉とするだけではすまない問題をかかえているのではなからうか。

5

いまここに『満州移民の村 信州泰阜村の昭和史』（小林弘二著、筑摩書房）という本がある。長野県の最南端に近い泰阜村（やすおか）から送り出された移民団についての記録である。満州移民村の歴史であるとともに、まさしく「もう一つの昭和史」である。この章の記述は本書に負うところが多い。

戸数七六五戸、人口五〇七〇名ほどのこの村から、佳木斯の近くに分村をつくるため、多数の農民が家族ぐるみで移住した。第一次先遣隊が入植したのが昭和十四年二月。その年の暮から翌春にかけて先遣隊家族が到着し、十五年

中に本隊が入植した。

満州移民はがんらい農村の過剰人口対策として考え出されたものであるから、当初から貧民送り出しという性格を帯びている。満州移民がとりあげられたとき、強力に反対したのは、労力不足で労賃が値上がりし、また地価が下って資産価値のへることを恐れた地主たちであった。ここでも移住者のほとんどは、村でいう「別家」（二・三男）か「賃取り」（日雇い）とよばれる、土地をもたぬ貧民であった。それに親類縁者や部落共同体から「お荷物」とみなされているような人物が加わったという。

送り出された人数は一〇二〇人（二三五戸）、帰国者は三五〇人をすこし上回ると推定されている。一時帰国者をふくめ、中国残留者で生存が確認されている者が四、五〇名にのぼり、残りの六〇〇人余りが死亡者で、大部分が敗戦後の混乱のなかでの犠牲者である。

『満州開拓史』によれば、敗戦時の在留邦人の総数は一五五万、うち死亡者一七万六〇〇〇人である。これに対し、開拓団関係者は二七万（うち応召者四万七千をふくむ）、このうち死亡者は七万八五〇〇人（病死が六万六九八〇人、戦闘または自決による死者一万一五二〇人）、生存見込の未帰還者は四五〇〇人と推定されている。この数字をみても、開拓団関係者にいかに多くの犠牲者が出たかがわかる。

開拓団総数の約四割は開拓第一線地帯（ソ満国境に近いところ）に配置され、五割が開拓第二線地帯（遊撃地区内）に匪民分離のため配置され、残り一割が開拓第三線地帯（鉄道沿線・重要都市・重要河川沿岸）に入植した。つまり移民の圧倒的多数は軍事上、治安上の判断にもとづいて配置された。入植した農民の多くはこのような事情を知らず、目かくしされたままに送りこまれたに等しい。悲劇の根源はここにある。

広大でしかも人口の少ない満州には、土地がいくらでも余っている、どこでも自由に耕すことができる——日本の国内ではこの種の宣伝が流されていたが、開拓民が入植したのはほとんどが既耕地であった。耕地の大半をしめる畑は中国人が耕した土地であり、水田は朝鮮人がひらいたものだった。

広大な割に人口密度のひくい満州には未耕のまま打ちすてられている原野がけっして少なくはない。黒龍江省内には開墾をまつ原野がまだ一億畝[↑]（六六〇万ヘクタール残っているといわれている。これは日本の水稲作付面積（二七〇万ヘクタール）の倍以上である。

だが、満州固有のアシの密生している原野を開拓するには莫大な労力と費用が必用とされる。それだけの労力を投下しても、それに見合う収穫がえられるのは、十年、二十年かけ耕地を肥沃にしてからのことである。日本の政府は投下した資本を一日でも早く回収したいと思っており、そのためには、原野の開拓よりは現地農民の耕地を取り上げるほうがずっと効率がよかったので、その方法をとった。

このことは、多年にわたって一部の日本人が平然とおこなってきた蛮行・殺戮にたいする怨恨とあいまって、中国の民衆の心に日本人への消しがたい反感をきざみつけた。骨髓に徹するまでの怨恨と反感は、日本敗北のあかつきの日本人移民への襲撃となってあらわれてくる。

満州移民の経営標準面積は水田一町歩、畑九町歩とされていたが、秦阜村開拓団のばあい平均耕地面積は畑二町歩、水田一町歩ぐらいである。それだけでも母村にくらべれば広大な耕地である。これだけの耕地を団員一人ではとって耕作できない。加えて気候風土という満州の特殊事情があり、雇用労働力なしではやっていけない。以前その土地を耕作していた中国人・朝鮮人農民が開拓団の雇農となり小作人となった。

土龍山事件の直後に入植した第三次開拓団、瑞穂村では、農業収益の大部分を労働賃銀支出にくわれるし、その外に現地農法のマスターの不十分および自然条件にたいする不案内も加わって、開拓民が経営主となって農業経営をおこなうことにいくたの困難が生じ、開拓民の自作地面積の減少による小作の発生がさけられなくなってきた。そして、農業経営から手を引いて小作料所得をはかるとともに、これによって生じる余剰労力を公務・運搬・建築業にふりむけて収入の増加をはかるか、あるいは小作料収入のみによって家計をいとなむか、地主的な移民が発生することになった（『瑞穂村総合調査』）。

そのころ日本国内では、戦争がエスカレートするのにもなって農村の労働力不足がはつきりあらわれてきたが、国策の名による満州移民の送り出しはなおも続行された。それと入れかわりに、多数の朝鮮人、中国人が労働力不足を補うため強制連行されてきている。朝鮮人が圧倒的に多く、その数は敗戦までの六年間に百五十万人にのぼるといふ。中国人の数は約四万。この人たちのなかには、戦地での捕虜のほかに、文字どおり「人狩り」によって拉致されてきた労働者・農民が多数ふくまれている。

日本人移民のほうは、満州で地主になった。しかし、侵略のおこぼれにあずかった期間は短かった。日ならずして敗戦の日をむかえ、苛酷な運命にさらされることになる。

現地の農民にとって日本人移民とは、いったいどんな存在だったろうか。原住民の土地を取りあげ、追いはらうもの、あるいは地主として彼らの上に君臨し、搾取するもの、それが現地農民の日本人移民像ではなかったか。

はなはだ心の痛む表現であるが、現地住民からみれば加害者ということになるだろうか。いや、日本の国策によって加害者にしたてられた被害者といふべきかも知れない。

追記

今年の七月、私は中国の東北地方を旅行したみぎり、ハルピン市内にある「東北烈士記念館」をはからずも見学することができた。この記念館の一階には「抗日烈士」、二階には「解放烈士」、合計二五〇名の遺影と事跡が展示され、人によっては遺品も陳列されている。

この記念館が出している『東北抗日烈士伝』（全三冊）を記念にいただいた。第二冊と第三冊は未入手だった。この第二冊に趙尚志將軍の事跡が詳しく述べられている。彼は抗日遊撃戦争の戦略戦術を研究しているのだが、その一環として瑞金の中央根拠地にならって遊撃根拠地の建設にはげんだことを、この本ではじめて知った。

記念館の二階の展示物のなかで、私は思いがけない人物の写真をみた。一九四六年、謝文東が捕えられた時の写真である。まわりの解放軍の兵士にくらべて背はやや低い。頭の禿げた、ずんぐりした、小肥りの体軀をしていた。